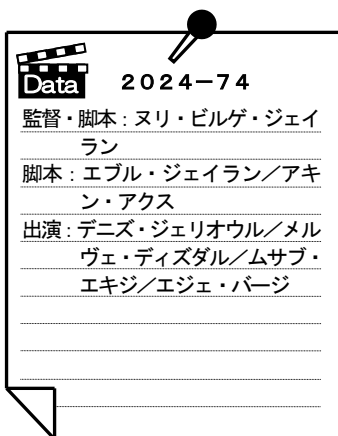




## 👁️👁️ みどころ

この邦題は昨今の日本にピッタリだが、196 分の前作『雪の轍』（14 年）と同じく、トルコ東部の東アナトリア地方にある雪深い村を舞台とした、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の 198 分の膨大な会話劇は、チョー難解！『戦争と平和』（56 年）で観た主人公たちの会話劇では深淵なトルストイの思想をそれなりに理解できたが、本作ではよほどの勉強が必要だ。

本作の主人公は全く共感できないヒネくれた男性教師だから、『若い人』（62 年）で見た石原裕次郎扮するカッコいい青年教師とは大違い。しかし、女生徒との“不適切な関係”が浮上した後のストーリー構成には、どこかに共通点も・・・？その不可解な展開に注目！

ちなみに、第 76 回カンヌ国際映画祭で最優秀女優賞を受賞したのは、その女生徒役ではなく、中盤から登場してくる義足のクールな女性教師役を演じた女優だが、スクリーン上で見る 2 人の男女の激しい議論風景を見れば、それにも納得！前作以上に聞き応え十分な本作は必見だが、今ドキの日本人がこの監督の思想にどこまで近づけるかは、かなり疑問だ。

—— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* ——

## ■□■カンヌがこの監督に注目！前作は 196 分、本作は 198 分■□■

2023 年 10 月 7 日の、ハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃を端緒とするハマス vs イスラエル紛争は、その後もイスラエルによるハマスに対するガザ地区への攻撃から、2024 年 4 月にはヒズボラが拠点とするレバノンへの空爆へと拡大し、さらに 10 月 26 日には、イランによる「ロケット弾攻撃への報復」を名目としたイスラエルによるイランの軍事関連施設へのミサイル攻撃に至っている。しかし、中東情勢は、宗教問題をはじめとして複雑である上、エジプト、トルコ、シリア、イラン、イラク等々、関係諸国の位置関係や力関

係の理解も難しい。政治的、軍事的な観点からは、『アラビアのロレンス』（62年）で描かれた「アカバへの攻撃」が興味深いし、文明的な観点からは、トルコ共和国の中央にある世界遺産「カッパドキア」が興味深い。

その「カッパドキア」を舞台とした、トルコ人監督ヌリ・ビルゲ・ジェイランによる第67回カンヌ国際映画祭パルム・ドール受賞作品が、『雪の轍』（14年）（『シネマルーム 36』124頁）だった。私はその評論で、「東の桂林 vs 西のカッパドキア」との小見出しで、①キノコ状の岩に代表される奇岩の不思議な景観、②奇岩の中に遺された膨大なキリスト教壁画、③地下何十メートルにも掘り下げられた地下都市、等の特徴をもつカッパドキア遺産の実態について、驚きをもって綴った。そのような前作に比べると、「二つの季節しかない村」と題された本作の舞台は、トルコ東部の東アナトリア地方にあるインジェス村。もちろん、そんな村は誰も知らないし、冒頭からラスト近くまで、全編198分で構成される本作の95%は雪、雪、雪に覆われた村の景色だから、何の面白みも感じることができない。

他方、私は前作の『雪の轍』の評論の冒頭に、「パルム・ドール賞を受賞した本作の3つの特徴とは？」との小見出しで、①3時間16分という長尺になっていること、②その舞台が世界遺産カッパドキアの壮大な風景とされていること、③少ない登場人物たちが交わす会話（議論）がチェーホフやドストエフスキーというロシア文学の作品に根ざした長くかつ深遠なものになっていること、と書いた。上記②については、本作はその真逆の設定で、その舞台は観光的に何のメリットもなく、主人公サメット（デニズ・ジェリオウル）とその同僚のケナン（ムサブ・エキジ）が忌み嫌っている、暗く陰湿なインジェス村とされている。

しかし、上記①については、前作が196分なら、本作は198分、また上記③については、前作と全く同じ趣で構成、演出されているので、それに注目！ちなみに、本作前半では、本作の主演女優は女生徒セヴィム（エジェ・バージ）と思われたが、上記③のとおり、深淵な会話劇たる本作において、後半に重要な役割を果たすヌライ（メルヴェ・ディズダル）が主演女優である上、彼女は第76回カンヌ国際映画祭で最優秀女優賞をゲットしているから、それに注目！

## ■主人公はニヒルな独身教師！オラ、こんな村イヤだ！■

本作の主人公は、本作で第56回トルコ映画批評家協会賞主演男優賞を受賞したデニズ・ジェリオウル扮するサメット。昭和の時代の日本では、「でもしか先生」なる言葉が流行ったが、パンフレットによると、「トルコでは教師は社会的に尊敬されており、国家公務員として3ヶ月の有給休暇や終身雇用が保障されていることもあって、人気の高い職業」らしい。また、「教員の配置は、中央政府が県を決定し、県の教育局により赴任校が決められる。学校に3年勤務して昇級試験に合格すると教頭に、さらに5年すると校長の試験を受験することができるため、若い校長も多い」らしい。

サメットは、雪深いインジェス村の学校に赴任して4年が経つ美術教師だが、何が何で

も、早くこの村を出たいらしい。本作は 198 分の長尺だが、導入部では丁寧にそんなサメットの授業ぶりや、生活ぶりが描かれていくので、それに注目！サメットは同じ宿舎で同僚のケナンと暮らしていたが、サメットと違い、ケナンは周辺の村の出身で、「早く結婚しろ」と繰り返す母親に悩まされているらしい。サメットのもう一人の友人は村の老獣医で、酒を組み交わしながらいろいろと話をしていた。そんなシークエンスの中でハッキリわかるのは、所詮サメットは“よそ者”で、この村には何の興味もないということだ。同僚のケナンは車が大好きだから、時々、雪の中を車に乗って、2 人でおいしい水を汲みに行ったりしていたが、サメットにとって、所詮この村での教師生活は、鬱陶しいばかりらしい。ちなみに、いつまで経っても昇級試験に合格しないケナンに対して、本作中盤から登場してくる若い校長は、きっと最初の学校に勤務して昇級試験に合格したため、5 年後に校長としてこの学校に赴任してきたのだろう。

日本の 2024 年の夏の暑さは異常で、10 月になっても夏日や真夏日が続出している。そのため、本来は四季豊かな味わい深い日本も、近時は「二つの季節しかない国」になりつつあるが、インジェス村は、それ以上に「二つの季節しかない」村だ。しかも、冬の期間はめちゃ長いらしい。かつて、吉幾三が歌って、大ヒットした曲に「俺ら東京さ行ぐだ」(84 年)があるが、本作導入部では、そんな吉幾三と同じように、毎回「オラ、こんな村イヤだ!」と考えながら、インジェス村で毎日陰鬱な教師生活を送っているサメットの“生態”を、じっくり鑑賞したい。

## ■男性教師と女性との距離感は?セクハラ疑惑は怖い!■

「学校モノ」の主人公は、『3 年 B 組金八先生』シリーズをはじめとして熱血教師が多いが、熱血教師ぶりが過ぎると様々な問題を起こすことになる。とりわけ、男性教師と女生徒との間で発生する可能性が高いのがセクハラ疑惑もしくは不適切な関係だ。本作では、ある日、町の学校で英語教師をしているヌライを紹介されたサメットが、結婚したがっている同僚のケナンに彼女を引き合わせた後、なぜか突然、普段からこっそり目にかけていた女生徒セヴィムからセクハラ疑惑(不適切な関係疑惑)をかけられることになるので、それに注目！コトを何とか大げさにならないように丸く納めようとする校長が、告発者やそれに関連する人物の名前を決して明かさないのは当然だが、こんな問題の処理が難しいのは、2024 年 3 月以降、大問題になっている兵庫県の斎藤元彦知事の“バワハラ疑惑”を見ればよくわかる。

私は 1960 年代の吉永小百合×浜田光夫のゴールデンコンビ作品を数多く鑑賞しているが、それとは全く異質の、吉永小百合×石原裕次郎×浅丘ルリ子が共演した魅力的な作品が、石坂洋二郎の原作を映画化した『若い人』(62 年)だった。同作では、吉永小百合扮するエキセントリックな女生徒と、石原裕次郎扮する魅力的な青年教師との間に、ある“不適切な関係”が発生したことがテーマとして描かれ、浅丘ルリ子扮する女性教師がそのトラブルの中で重要な役割を果たしていた。そんな原作は、第二次世界大戦後の、民主化が

急速に進む日本の女学校を舞台とした原作だけに、男性教師と女生徒との間の“不適切な関係”をテーマにしながらも陰湿性が全くなく、あくまで明るくカラッとした展開と結末が大きな特徴だった。

しかして、本作も『若い人』と同じように、主人公はインジェス村の教師サメットだし、ストーリーの軸は、サメットと女生徒セヴィムとの間に生まれたとする“不適切な関係”だが、『二つの季節しかない村』というタイトルどおり、雪と氷に覆われた暗い世界の中での陰鬱な展開になっているので、それに注目！

## ■□■最優秀女優賞は、義足のクールな女性教師役に！■□■

本作で第 76 回カンヌ国際映画祭の最優秀女優賞を受賞したのは、エキセントリックな女生徒セヴィム役を魅力的に演じたエジェ・バージではなく、中盤から登場してくる町の学校で英語教師をしているヌライ役を演じたメルヴェ・ディズダルだ。そして、『若い人』において、浅丘ルリ子演じる女性教師がストーリー全体に大きな役割を果たしたのと同じように、本作においても、最初はサメットに紹介された彼女が、サメットの仲介（？）によって同僚のケナンとの間で愛を育んでいく姿が描かれた後、あっと驚く、いかにもヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督らしい意外なストーリー展開（三角関係？）になっていくので、それに注目！ちなみに、義足で教壇に立っているヌライの足の引きずり方はごくわずかだが、右足の半分が義足だから、かなりの重傷。テロに巻き込まれて片足を失ってしまった彼女は今、知的でクールな英語教師として教壇に立っていたが、今日までに至る心の中の葛藤は相当なものだったらしい。

私には議論好きの（？）彼女が、いかにも田舎村出身で何の取り柄もない男、ケナンを結婚相手に選ぶとは思えなかったが、サメットはそんなヌライをどう見ていたの？新車を購入する話を契機として、ヌライとケナンの仲が急速に深まりかけたが、ある日、食事に招かれたヌライの家に向いたのは、なぜかサメット一人だったから、アレレ、アレレ？ここには一体どんな策略が・・・？本作と同じ日に観た『国境ナイトクルージング』（23 年）における若い男 2 人と女 1 人の三角関係も微妙だったが、本作に見るサメットとケナンそしてヌライを巡る“三角関係”は、それ以上に微妙だ。そんな本作で、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督が演出する、サメットとヌライとのベッドシーン（？）は、さていかに？

## ■□■聞き応え十分な会話劇は本作も健在！いや前作以上！■□■

私はすべてを会話劇で構成する韓国ホン・サンス監督作品が大好き。彼の映画の売りは、牛井の吉野家と同じく「うまい、安い、早い」だが、最新作『イントロダクション』（20 年）（『シネマ 51』222 頁）は、彼の長編第 25 作目だからすごい。そんなホン・サンス監督作品の会話劇のテーマは、日常的なものや身近なものが多いうえ、会話内容も軽妙かつユーモラスなものが多い。しかし、ハリウッド映画『戦争と平和』（56 年）で見た会話劇は深淵なテーマに沿った難解なものであったうえ、宗教的なテーマがたくさん含まれていたから、さらに難解だった。私は前述のとおり、トルコの巨匠、ヌリ・ビルゲ・ジェイラ

ン監督の前作『雪の轍』の第3の特徴として、少ない登場人物たちが交わす会話（議論）がチェーホフやドストエフスキーというロシア文学の作品に根ざした長くかつ深遠なものになっていること、を挙げたが、それは本作も同じだ。

本作前半は、主人公として登場する、インジェス村に赴任して4年になる教師サメットとその同僚ケナンの学校や社会に対する不平不満を中心とする会話劇が目につく。また、ヌライが登場し、ヌライとケナンとの交際が始まった後は、狭いインジェス村だけの話題から少し広い世界に拡大するものの、それでも話題は社会に対する不平不満が中心だ。また、“不適切な関係”の告発によって、サメットの教師生活に大きな影響を及ぼす女生徒デヴァムとの会話劇においては、圧倒的に優位な立場にあるサメットと、あくまでそれに従うしかないデヴァムとの力関係の差が歴然としているから、本来の会話劇になっていない感が強い。

それらに比べると、ケナンとヌライとの一見順調に見えた男女交際（？）の中に、突如割り込み（？）、アレレ三角関係の始まり？と思える状況下での、ヌライの家でワインを飲みながらのサメットとヌライの2人だけの会話劇は、その内容の濃さと議論の白熱ぶりがすごいので、それに注目！これを見れば、ヌライ役を演じたメルヴェ・ディズダルが本作で第76回カンヌ国際映画祭最優秀女優賞を受賞したのは、ひとえにこの白熱した議論展開で見た演技に対してだということがよくわかる。

大学時代に学生運動に熱中していた当時の私たちの議論での常套句は、「展開してみよう！」だったが、本作のクライマックスとなる、サメットとヌライの白熱した会話劇においては、そんなことを言われなくても、お互いの持論を堂々と展開していくので、それに注目！同じ会話劇でも、韓国のホン・サンス監督作品のそれと、トルコのヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督作品のそれが、ここまで大きく違うことにビックリ！

## ■□■この監督の“思想”に迫りつける？そりゃ難しい！■□■

私が198分にも及ぶ本作を観て何よりも痛感したのは、196分の前作『雪の轍』と同じく、膨大な会話劇におけるセリフの深淵さと重厚さだ。本作を監督したヌリ・ビルゲ・ジェイランは、編集を兼ねているほか、共同脚本も書いているから、その膨大な会話内容に同監督の“思想”がいっぱい詰まっていることは間違いない。

そこで問題になるのは、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の“思想”とは何かということだ。しかし、“世界文学全集の代表”ともいえる『戦争と平和』におけるトルストイの思想は、ハリウッド映画『戦争と平和』の中でピエールとアンドレとナターシャが三者三様に語り合う会話劇の中で明らかだが、邦題を『二つの季節しかない村』とし、舞台をトルコの東アナトリアの雪深いインジェス村とし、前述のような主人公たちが、前述のようなストーリー展開の中で語り合う会話劇の内容から、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の“思想”を明確に探り出すのは容易ではない。また、戦後80年近くの間、平和と安全と豊かさに慣れてしまい、民主主義の最も大切な選挙権すらろくに行使せず、アホバカバラエティとノ

一気な CM ばかりの TV がタレ流しとされ、友人同士のどうでもよい SNS ばかりにうつつを抜かしている昨今の日本人に、本作に込めたそんなヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の思想がわかりづらいのは当然だ。唯一なるほどと思うのは、本作は「二つの季節しかない村」だが、日本は今、「二つの季節しかない国」になりつつあるということくらい・・・？

ちなみに、私にもサッパリわからなかったのは、ある意味で本作最大のハイライトとなるサメットとヌライの超難解な議論を経て、やっとベッドシーンに移ろうとする時、私には全く理解できない撮影現場のシーンに移っていくことだ。こりゃ一体ナニ？ちなみに、この点については、パンフレットにある「すべてのキャラクターの感情はわたし自身が感ずることです」と題されたヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督インタビューでも、「映画の白眉のひとつが、サメットとヌライの夕食時の長い会話のシーンですが、あそこで突如、サメットがドアを開けると撮影現場になる『メタシーン』を入れたのはなぜですか。」と質問されている。さらに、パンフレットにある北川れい子氏（映画評論家）の「一人相撲の先に見たのは」と題する文章の中でも、「ただちょっと不思議だったのは二人がベッドに入る前、サメットが彼女に言われて部屋の明かりを消しながらドアを開けるくだり。と、そこはガラとした倉庫スタジオで、隅にはいくつかの機材も。これは監督が仕掛けた観客への罠？」と指摘されているので、これは必読！

さらに、本作のパンフレットには、「ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督より」の「Note」があり、その冒頭には、「トルコの東アナトリア地方の学校に勤める美術教師の体験を通して物語を作ろうと思ったのは、豊かさや具体的な例をいくつか提示し、善と悪、個人主義と集団主義といった、トルコでは主要な二項対立として絶えず私たちに突きつけられている基本的な概念について議論する余地を与えてくれると考えたからだ。」と書かれ、ラストには、「歴史によって沈黙させられたこの辺境の地を舞台に、地方赴任の過程で起こった出来事の無味乾燥な感覚と、教師という職業が持つ宿命と、かろうじて生き延びることへの不変のこだわり、そして高潔な理想と厳しい現実の残酷な冷酷さ、その関係を私たちは伝えようとした。」と書かれているので、この文章全体も必読だ。しかし残念ながら、これらを必読し、本作を何度観ても、今の日本で過ごしている私たち日本人が、本作に込めたヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の“思想”に、どこまで近づけるかは、かなり難しいだろう。

2024（令和6）年10月30日記